

令和7年度 全国学力・学習状況調査結果（3年生）の分析

【国語】

正答率

区 分	九 中	東京都（公立）	全国（公立）
全体	57%	57%	54.3%
A 話すこと・聞くこと	55.4%	55%	53.2%
B 書くこと	58.1%	56.5%	52.8%
C 読むこと	64.7%	65%	62.3%
選択式	68%	67.1%	63.9%
短答式	78.6%	75.5%	73.6%
記述式	24.4%	28.2%	25.3%

全国や東京都と比較しても上回っているものが多い。一方で、「C 読むこと」に関しては、東京都と比較すると下回ってしまっている。また、解答形式が「記述式」のものは、東京都と全国と比較すると正答率が低くなっている。以上のことを踏まえ、以下の取り組みを行っていきたい。

- ①「話すこと・聞くこと」では、自分の考えを伝えたり、他者の考えを聞いて考えを深めたりする活動を行っていく。
- ②「書くこと」では、自分の考えを文章にするだけでなく、「読むこと」の観点と合わせて表現の効果や作者の考えなどについて自分の考えを書く活動を行う。
- ③「読むこと」では、表現や情景描写などに着目し、その効果や人物像について考える活動を行う。

【数学】

正答率

区 分	九 中	東京都	全 国
全 体	55%	53%	48.3%
数と式	49.0%	49.1%	43.5%
図形	54.5%	51.4%	46.5%
関数	53.2%	52.4%	48.2%
データの活用	66.3%	63.1%	58.6%

- ①「数と式」で都平均より0.1ポイント下回っており、「図形」、「関数」、「データの活用」でそれぞれ3.1ポイント、0.8ポイント、3.2ポイント上回っている。全ての領域において基礎的・基本的な知識や計算力の定着が見られた。
- ②「数と式」では、数の性質を予想し説明する問題の正答率が27.4%となり、考察力に課題が見られた。改善方法として、考察力を向上させる授業展開の工夫や教材作成を行っていく。
- ③「図形」では、証明問題において正答率が約45%となり、基本的な証明の書き方が定着しているとみられる。
- ④「関数」では、グラフから必要な情報を読み取る問題の正答率が73.8%であった一方、グラフを用いて問題解決の方法を数学的に説明する問題の正答率が36.9%となり、関数についての基本的な知識・技能は定着していると考えられる。数学的な思考力を育成するために、探究学習の機会を増やしたり、考え方や求め方を説明・発表したりする活動を増やす。
- ⑤「データの活用」では、相対度数の意味を理解しているか問う問題の正答率が48.8%、必ず起こる確率の意味を理解しているかを問う問題の正答率が83.3%となり、おおむね定着できているとみられるが、1年生の時に学習した「相対度数」についての理解の定着に課題が見られたため、反復練習を通して定着度を向上させていく。

【理科】

正答率

区 分	九 中	東京都	全 国
全 体	48%	50%	49%
エネルギー	57.6%	56.9%	56.1%
粒子	65.0%	62.6%	61.73%
生命	44.4%	44.5%	44.8%
地球	37.3%	39.0%	37.3%
平均 IRT スコア	513	506	503

※IRT スコア

項目反応理論（Item Response Theory）のこと。今までの正答数・正答率だけを見るスコアではなく、児童生徒の正答・誤答が、問題の特性（難易度、測定精度）によるのか、児童生徒の学力によるのかを区別して分析し、児童生徒のスコアを推定する統計理論。

- ①問題の難易度が1～3の問題（エネルギー分野で2問、粒子分野で3問）に関しては、どの問題も正答率85%を上回っており、基礎的な知識技能の定着が見られた。
- ②記述問題に関して、無解答率はどの問題も10%を下回っており、正答率が記述問題であることによって著しく下がるということもなかった。このことから、理科的な知識を用いて、説明する力の定着もみられる。
- ③「呼吸を行う生物を選ぶ」問題において、東京都平均正答率が31.1%なのに対して、本校の正答率は17.1%であった。動物植物に限らず、生物は呼吸することを今一度確認する。
- ④そのほか、正答率が20%を下回った問題（2問・いずれも難易度は5）の共通点として「実験結果を予想する、または考察する」問題であった。これを踏まえ、普段の授業でも「なぜこのような実験を行うのか」「この実験を行うことでどのような結果が得られると考えられるか。また、どのような比較をすると考えられるか」を予想・考察できる授業展開や教材工夫を行っていく。